
団地

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

団地

【Zコード】

N8166E

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

佳子はT市の団地に住む、ぐく普通の主婦。子供と出かけたスーパーで同級生のミイコとひさしひさの再会。ミイコと一緒に帰宅した後、警官の訪問を受ける。マネキン人形の盗難事件があり、容疑者らしき男が近所で見かけられているというのだ・・・。

T市の団地群の一つの棟の五階に、佳子は住んでいる。

彼女には二つ年上の夫と、今年三歳になる男の子がいる。

「寒い寒い」

年が明けてようやく冬らしくなり、朝晩の冷え込みが厳しくなった。

一昨日から故障している湯沸かし器のせいで、彼女は大鍋にお湯を沸かして洗い物を使っていた。

「さてと」

朝食の後片付けをすませ、風呂掃除をし、洗濯物を全自动洗濯機に放り込む。

佳子は居間のソファにグターッと寝そべった。

「テレビ、テレビと」

リモコンを操作し、電源を入れ、いつも見ているチャンネルに合わせる。

途端に画面に映つたのは「連續婦女失踪事件を追う! 事件の真相を透視する美人靈媒師!」といつ字幕だった。

「またア。嘘臭いわね」

佳子はテレビを消すとリモコンを投げ出し、ソファから起き上がりてキッチンに行つた。

「もうこんな時間か」

壁に掛けられた時計は、十時五十分を指していた。

「お昼ご飯は何にしようかな」

佳子は冷蔵庫のドアを開いた。

ところがそこには卵が三個、使い切ったマヨネーズ、ほとんどの身の入っていない焼き肉のタレのビン、少しヨタつたトマトが一個あるだけだった。

「あらま、いつの間にこんなに片付いちやつたのかしら? 買い出

しに出かけなくちゃ」

彼女は寝室兼子供部屋に行つた。

男の子が携帯ゲーム機を動かして遊んでいる。

「勇、^{ゆう}お出かけするからゲーム終わりにしてね」「はーい」

勇と呼ばれた男の子は、ニッコリ笑つてゲーム機をおもちゃ箱の中に片づけると、

「お母さん！」

と佳子に飛びつき、二人で部屋を出た。

「お父さんがチャーリンゴで行つたから、ブーブーで行けるよ、勇」「わーい！」

佳子は勇を伴い、玄関を出た。

その時彼女は、ずっと離れた同じ階の部屋に、マネキンの脚のようなものが入つて行くのを見た。いや、見た気がした。

「何だろ、今のは？」

佳子が思案していると、勇がたまりかねたのか、

「早く行こうよオ、お母さーん」

と手を引いた。佳子はハツとして勇に目をやり、

「ああ、ごめん。行こつか

「うん！」

一人が反対方向にあるエレベーターホールに向かつて歩き始めた時、そのマネキンの脚らしきものが消えた部屋から、氣味の悪い人相の男が顔を出して廊下を見渡し、スー^ツとドアを閉じた。

しばらくして二人は近所の大型スーパーに着いた。

その時だつた。

「佳子じゃない？」

と声をかけられた。

佳子はハツとして振り向いた。

そこには彼女と同じ年頃の、大きなレンズの丸眼鏡を掛けたショートカットの美人が立っていた。

佳子はびっくりして、

「ミイコー、ミイコじゃない！？」

「久しぶりね。それもこんなところで再会するなんて」

「そうねエ。貴女、相変わらずお勉強？」

佳子はミイコの右手にある紙袋を見た。

エキナカにある大手の本屋のものである。ミイコは頷いて、

「ええ。何としても現役合格したいのよ。でないと、私的人生設計が狂っちゃうわ」

「夢は大きく持たないとね」

佳子がおどけて言うと、ミイコは少しムツとして、

「夢じやないわよ。近い将来の現実。貴女が警察の『厄介になつたら、タダで弁護してあげるわよ』

「何よ、それ？」

今度は佳子がムツとした。やがてミイコは勇に気づいた。彼女はしゃがみこんで、

「あら可愛い。この前会つた時は、お猿さんみたいだつたのに」と勇の頭を撫でた。勇は佳子を見上げて、

「お母さん、このおばちゃん、だアれ？」

「あらま、憎らしことを！ 私はね、お母さんと同級生なのよ」

ミイコは勇のほっぺを突つついて言つた。勇はキョトンとして、「ドウキュウセイって何？」

「あっ、そつか。お母さんとね、年が一緒なのよ」

「じゃあやつぱりおばちゃんだ」

勇は笑つた。ミイコもつられて笑い、

「貴女も随分老けて見られてるのねエ」

と佳子を見た。佳子は溜息を吐いて、

「子供の年齢感覚つてわからないわ。先輩が遊びに来ると、『お姉ちゃん』って言うのよ」

「まあ。どういう感覚してるの、勇君？」

「ミイコは勇を見た。

「人はその後もとりとめないこと話をしながら、買い物をすませた。

「ねエ、ミイコ、これから大学に戻るの？」

「いいえ。今日はもうおしまい。帰るわよ」

「なら私たちに来ない？」

「あら、いいの？」

ミイコは勇を見た。

勇はまだミイコをちょっとばかり怖がっているようだ。

私も夫の聖司も眼鏡をかけていないせいかも知れない、と佳子は思った。

「勇君は賛成してくれるかな？」

「いいわよね、勇？」

と佳子は勇の頭を撫でながら尋ねた。勇は佳子を見上げて、

「いいよオ。お母さんのお友達でしょ？」

「よし、これで決まり。さて、駐車場に行きましょうか

今度はミイコが尻込みした。彼女は苦笑いをして、

「け、佳子、まさか貴女、ここまで車で来たの？」

「そうよ。勇を連れて歩いて来られるわけないでしょ？」

「そ、そうねエ……」

ミイコは顔を引きつらせたままである。佳子は変に思つて、

「どうしたのよ？」

「だ、だつてさア、半年かかつて、それもお情け同然で卒検受かつた貴女の運転がどんなものかってことくらい、私だつて知つているのよ」

「あつ！ 私の運転技術を信用してないってこと？」

「そこまでは言つてないわよ」

ミイコは佳子に詰め寄られてタジタジである。そして考えあぐねた挙げ句、解決の糸口を掴んだ。

「やうそう。やつぱり行くわ。最近物騒なのよね、この辺。痴漢出まくりだし。ブティックとかデパートのマネキンがよく盗まれてるらしいの」

「マネキンが?」「

佳子は出かける時見かけたマネキンの脚のようなものを思い出した。

「何か思い当たることもあるの?」「

「い、いえ、別に……」「

ミイコは佳子の反応に納得していない様子だった。

まもなく三人は団地の駐車場に着いた。

「あーっ、やっぱり怖かった。猫が飛び出した時は、猫より貴女の悲鳴に驚いたわ」

「仕方ないじやない! 黒猫だったんだもの。何か不吉なことが起こらないといいけど」

佳子が神妙そうに言つて、ミイコは田を見開いて、

「あらま、貴女ってそういうこと気にするタイプなの?」「

「そう。どうせしつづいて、気になつちやうのよね」

佳子達はエレベーターホールに向かつた。

「早速不吉なことが起つたわね」

とミイコが言つた。エレベーターが故障中になつていたのだ。

「出かける時は動いていたのに。ホント、嫌だわ、黒猫」

「ハハハ」

ミイコは佳子の言葉に苦笑した。

三人が五階の佳子の部屋に着いた時、時計は十一時を回つていた。

「大変大変、お昼の用意しなくちゃ!」

「私も手伝うわ」

とミイコが言つと、佳子は満面の笑みを浮かべて、

「遠慮してくれ、オロゲのミイコさん」

「あつ！」

「今度はミイコが止めを刺された。彼女は肩を竦めて、
「わかつたわよ。貴女、性格はともかく、料理はおいしいもんね」
「何よ、その言い方は?」
「まあまあ」「まあまあ」

「マイコはギッチンから逃げ出し、リモコンでテレビをつけた。ち
ょううどワイドショーで婦人連続失踪事件をやつているところだった。
マイコは買つて来たお菓子を一つ頬張り、

りだわ」

「ええ？ 何か言つた？」
手を洗いながら佳子が尋ねた。ミイコは佳子を見て、「何でもないわよ」

と答えた。勇はミイコから離れたといひでとてもわかるとは思えな
いが、必死にテレビを見ていた。

「つまり、女性の失踪している場所、時間はバラバラでも、その女性達の住んでいたところに一致が見られるということですね？」

に目を向けた。

「うなづいて、その仕事にいたるまでの道のりを聞かせて貰おう。

女性レポーターが見せたパネルを見て、ミイコは仰天した。

「何ですか？」

佳子は包丁を片手に居間に来た。そしてテレビに近づき、「ホントだ。あれ、この辺よ。どうしよう? 犯人がこのあたりに住んでるってことだわ」

「うーん。怖いわね。マネキン泥棒ビンのじやないわ」

ミイコと佳子は顔を見合せた。

「どうしたのオ、お母さん、おばあちゃん?」「それがね……」

と佳子が説明しようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

「はーい」

佳子はドアに小走りで近づき、チャーンを掛けてから開いた。

「お昼時に失礼します」

そこに立っていたのは、制服姿の若い巡査だった。いわゆるおまわりさんだ。

「実はここ何日かの間に、あちこちでマネキン人形が盗まれているのを」存じですか?」

と巡査は切り出した。佳子はチラッとミィイコを見てから、「ええ。それが何か?」

「そのことで、ここの中の方々が何人か、マネキン人形を運んでいる男を目撃したというのです。一応店からも被害届が出ていますので、こうして団地の方にお伺いしているのです。奥さんはそのような男を見かけたことはありませんか?」

佳子はマネキンの脚のことを思い出した。そして、「男の人は見かけていませんけど、マネキンの脚のようなものがある部屋に入つて行くのを見かけた」とあります

「それはどの部屋ですか?」

巡査は手帳にメモを取りながら尋ねた。佳子は、

「同じ階の一一番端の部屋だと思います。ただ、はつきりと見たわけではないので」

と自分の証言の重大さに気づき、逃げ腰に答えた。しかし巡査は、「ちょっとどー一緒に願えませんか? その部屋の方にお話を伺いたいので」

「ええつ? 私も行くんですか?」

佳子は不安そうにミィイコを見た。ミィイコは、

「勇君は私が見てるから。もしその人がマネキン泥棒なら、早く捕まえた方がいいし、そうじゃないなら、それも早くはつきりした方

がいいわ

「うーん」

巡査は真剣な顔で佳子を見ている。佳子は、「じゃ、行きましょうか」

「はい。ありがとうございます」

二人は廊下を歩き、その部屋の前に来た。

表札が出ている。「慶道寺真介」と書いてあつた。

「随分厳めしい名前ですね」

佳子のはるか上で巡査が言った。

一人の身長は三十五センチくらい違っていた。

巡査は佳子に田配せしてから、チャイムを鳴らした。

「何ですか？」

ドアが少し開き、むさ苦しい無精髭の男が顔を出した。巡査は、「実はこの団地にマネキン人形泥棒がいるんです。貴方はそのような男を見かけていませんか？」

「いいえ、見たことありませんね」

男はドアを閉めようとした。巡査はそれを手で制し、「ちょっと待つて下さい。貴方の部屋にマネキン人形の脚が入つて行くのを見かけた方がいるんですよ」

男はしばらく黙っていたが、やがて大笑いし始めた。

「何がおかしいんですか？」

巡査はムツとして言った。しかし男はニヤニヤしたままで、「入りな。俺はマネキンなんか盗んでいねえよ」

とドアを開いた。巡査と佳子は導かれるまま中に入った。

「何この臭い？」

佳子はハンカチで口と鼻を押さえた。巡査も手で口と鼻を覆いながら、

「何でしょうね？」

男は部屋を仕切っているカーテンの前にいた。

「この向こうには俺のコレクションがある。これを見れば俺がマネ

キン泥棒じゃないってわかるさー！」

と男はカーテンを引いた。そこには美しく着飾つたマネキンらしきものが三体立っていた。

「やっぱりマネキンじゃないか！」

巡査は怒りの目で男を睨んだ。しかし佳子は真っ青になつて、「お、おまわりさん、マネキンじゃありません！」「これ、人間、人間です！」

「！？」

巡査はびっくりしてよくマネキンらしきものを見た。

それは確かにマネキンではなく、紛れもなく人間であつた。

蝶で塗り固められた、女性の遺体だったのだ。

「どうだ、これで俺がマネキン泥棒ではないとはつきりわかつただるわー！」

男は勝ち誇ったようにけたたましく笑つた。

その笑い声は五階中の廊下に響き渡つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166e/>

団地

2010年10月8日14時33分発行